第18回「文芸思潮」現代詩賞 発表

第一八回「文芸思潮」現代詩賞に多数の御応募をいただきまして、まことにありがとうございました。おかげさまで前年よりはるかに多い三六四名の方から九〇八篇の作品をご応募いただき、充実したコンテストとなりました。心から御礼申し上げます。

五月末に集まった応募作の中から、まず選考委員会予選担当によって第一次予選、第二次予選、第三次予選の選考が行なわれました。それらを通過した作品を対象に、十一月一三日、渡辺みえこ、五十嵐勉各選考委員により、最終選考が行なわれました。厳正な審査の結果、以下の通り決定しましたので、ここに発表させていただきます。

今号には最優秀賞・優秀賞を掲載させていただきますが、奨励賞作品も、次号以降できるだけ「文芸思潮」誌上に掲載させていただく予定です。

授賞式は、残念ながらコロナウィルス流行の影響により今年も見送らせていただきます。賞状・賞品・賞金などは明年一月下旬までに直接受賞者に発送させていただきます。

第一九回「文芸思潮」現代詩賞は、明年も同じ要領で募集を行ないます。どうぞ奮って御応募ください。

「文芸思潮」現代詩賞選考委員会／文芸思潮

第18回「文芸思潮」現代詩賞

最優秀賞

「漂流の窓」「静謐の繭」
「君の命が杯になる」
由木名緒美（福島県会津若松市）

「染める」「鬼ごっこ」
「シャボン玉」
後藤　順（岐阜県岐阜市）

優秀賞

「池袋駅、午後二時」「秋の牢獄」「咳ヲ縊スルルハトホキ春ノユメ」
北村灰色（埼玉県和光市）

「合歓木」「かっこう料理店」
笹井のぶこ（北海道帯広市）

「泪の塊」「あの子の海」「失った言葉」
遠藤芳子（東京都狛江市）

「命に終わりなどなかった」「たれる」「雫」
橘いずみ（島根県出雲市）

「しらふのくるい」「たった独りで内輪もめ」「ついに雄叫びは上がる」
藤城　藍（京都府京都市）

「ゆらり」「システム」「ファースト・キス」
松永悠希（愛知県豊橋市）

「クローン」「アンニュイ」「針のような崖の上に立つ翼のない鳶」
薬師丸怜央（千葉県流山市）

「雑閙（ざっとう）」「topology」「分界」
中村郁恵（北海道札幌市）

「死の想い」「別離」
佐藤　裕（神奈川県横須賀市）

奨励賞

「銀髪美犬ひと撫で」「詩刑執行」「蝙蝠姫９２５」
岩尾宏紀（大分県速見郡）

「確執」「鮭」「戦」
麻生ゆり（愛知県豊明市）

「隙間を泳ぐ」「僕ら罪の子、不幸の子」「生に到る病」
実川阿仁（神奈川県川崎市）

「シンコペーションサイバーライフ」「ツイート」
「少女、呼吸」
及川るな（東京都世田谷区）

「都市『寄生回生』」「縄張り」「託せるならば、あの雲に」
久利潤保（福岡県久留米市）

「虚空の軍列」「彫像と現在時」梶原大賀（兵庫県神戸市）

「顔」「空」「宙」
十路田道広（福岡県福岡市）

「木蓮」「失楽園」「春の詩」新夏（群馬県伊勢崎市）

「恋」「足止め」「半身」
八柳　椋（京都府舞鶴市）

「青春を飲む」「青春を吐く」日向　鷗（東京都港区）

「季節邂逅」「線路は続いて」遠藤月尾（東京都福生市）

選評

詩魂の表現

渡辺みえこ

第一八回「文芸思潮」現代詩賞応募作品は、豊かな詩情を持っている作品が多く、その詩魂を詩作品にするためのそれぞれの形式の模索が感じられた。

情報も錯綜し、グローバルな現代文化の中で生きる「私」の詩的表現として、常識や慣習に亀裂を入れるような、詩の言葉も散見された。

最優秀賞の由木名緒美氏は、比喩が的確で言葉とイメージが適合し独特な詩的世界を形成している。「静謐の繭」については、「静けさは声を出すことができない」というのは、詩情を聞き取ることのできる感受性のある耳を持った著者が、「涙の零れ落ちる音を」さえ聞きとる。そのように世界を見つめる目が世界と出逢うことで詩の魂は、さらに醸成されていくだろう。

最優秀賞の後藤順氏――「鬼ごっこ」は、鬼ごっこの鬼の「ぼく」が、「ノゾミ」を見つけられない喪失感を三陸の美しい風景と共に、子どもの遊びとして受け止めようとする痛みが静かに表現されている。「地震」はもう少し具体的な描写と、「ノゾミ」と「ぼく」との関係性が書かれているともっと読者に伝わったのではないだろうか。

優秀賞の中村郁恵氏の「雑閙（ざっとう）」は今生きている現実を冷静に見つめ、優れた現代都市風景詩が構築されている。「靴音」「ひとり立ち止まる」などと書かれているが主語はなく、人々は都市の風景となってゆっくり流されていき、ふとネガフィルムのように反転もする。「topology」は、輪ゴムという身近なものを題材にした秀作だ。あまりに卑近なもので、誰も詩の題材とは思わないものだが、その中に都市の風景を重ねる視覚的な発想は、斬新だ。この非人称の語りも乾いた都市の空気を効果的に映している。疑問を残したままの終わり方もよい。

優秀賞の薬師丸怜央氏は、「針のような崖の上に立つ翼のない鳶」の表現に、苦しい状況が伝わってくる。十六行目の「まるで　私達　みたい　だ」というのは、散文的説明になってしまうのでないほうが良い。そういうことは他の比喩で分かるので。「老女水晶玉の向こうで顔伏せる」で終わって余韻を残すこともできる。

同じく優秀賞の藤城藍氏の「しらふのくるい」は透明鮮烈で、内面を書いていて現実世界とのずれが良く表現されている。異質な言葉のぶつかり合いが異化を産んで詩的衝撃が効果的である。六連目の「吐き気がして頭がどうにかなりそうなのに／ああどうしてこんなに気持ちがいいのか！」というような告白的な説明は他で表現しているので隠したほうがよい。

松永悠希氏の「ゆらり」は、流れがスムーズで詩形が整っている。もう少し長く書いて、三連か四連に分けて、真ん中で盛り上がりを作るとさらに説得力がでる。

笹井のぶこ氏の「合歓木」は、合歓木の「花糸が　淡くあかく」流れ、歩く人の視線の移動と記憶、あかくなった川を洗う人の映像が交錯し、そこで生きてきた人の姿が幻のように揺れる。中心になる形、例えば「石段に焼き付いた影」などをもう少し明確に書くとはっきり伝わるものが残るのではないか。

遠藤芳子氏「泪の塊」は普通の流れる涙ではないように思える。涙でなく「泪」としたのは、著者の思いがあったのだろうか。江戸時代にあった「泪橋」は、鈴ヶ森など処刑場手前で罪人と今生の別れの場として名付けられた。「ガラス細工の目に盛り上がる泪」などをもう少し書き込んで具体的描写で伝えて欲しい。「あの子の海」は爽やかな風が感じられてよい。六連目、「柿の実のように」はないほうがよい。流れ星は消えていくようにはかないが、柿の実は重いので。

佐藤裕氏は、重い風景を見つめているが、少しの光があると闇が輝くように対比的な光のようなものもいれてみてはどうだろうか。

北村灰色氏の「池袋駅、午後二時」はある都市の静止画像でもあり、こんな都市風景の連作もできるのではないだろうか。

奨励賞「青春」（日向鷗）は、著者にとって大事な概念であるのでこの言葉を使わずに青春を表現するとよい。

及川るなの「シンコペーションサイバーライフ」「ツイート」などは、日常描写のなかに自然に詩的幻想がはいっていて寓話的になっている。よい詩情を持った行が沢山ある。例えば「どこまでも落ちることのない紙飛行機。音を立てずに、一匹の金魚が私の夏の空を今でも泳ぎ続けている」など一編の強い詩にすることもできる。

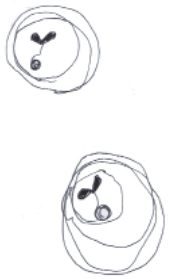
「縄張り」（久利潤保）は畳みかける強さがある。具体的な場が書かれていれば、架空であっても収斂されて一編の詩のまとまりとして掴める。

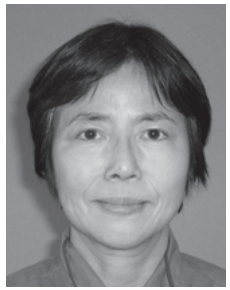
惜しくも奨励賞にはならなかったが、佳作の中にもいい作品があった。

「小鳥の消えた真昼の樹の下で」（森下万尋）の著者は「石の悲鳴」を聞いているのであろう。よい詩行があるが所々でイメージが切れてしまうので、まとまりのある像を結べるところが中央あたりにあると強くなる。

「母の日」（元澤一樹）は、母との生と死の関係が、身体的に書かれていて母への挽歌となっている。最終連は視覚

的に訴えてきて心に残る。
今回もそれぞれの詩を通して今、生きている人の内面の声に接した思いがした。





渡辺みえこ

わたなべ　みえこ

日本女子大学、文教大学など元大学講師。創作技法論（詩）、日本文学講読。詩誌「いのちの籠」同人。日本現代詩人会、日本詩人クラブ会員。
2009 第59回Ｈ氏賞詩集賞選考委員。
2015 第47回横浜詩人会賞選考委員長。
詩集
『耳』詩学社 1972。『喉』思潮社 1982。『声のない部屋』思潮社 2001。『水の家系』南風プレス 2002。
『空の水没』思潮社 2013（第十回日本詩歌句大賞受賞）。
文芸評論『女のいない死の楽園―供犠の身体三島由紀夫』パンドラカンパニー刊　現代書館発売 1997（第一回女性文化賞受賞）など多数。

佳作

「水の雫」「線香」「命の水」　水沢朱実
「蚕蛾―交雑／motion」「母の日」　元澤一樹
「生まれたての太陽が」「枝さき」　北原　満
「父の戦い」「奈保子さんへの愛とその経緯」　吉井　裕
「特急列車」　田中浩司
「愛する」「再生」「あなたがいた頃」　絹本ゆい子
「光る産声」　天ヶ谷麗
「記憶の途中」「四文字　アフリカ」　松原泰子
「人間という生き物」

「華を悼む」　剣城かえで
「てのひら」「手のひら」「掌」　向日　葵
「見えるか」「人生曳航」「笑み」　小山田良三
「小鳥の消えた真昼の樹の下で」　森下万尋
「オーバーライト」「渋谷の火星人」　華賀　透
「チーズケーキ」　鴉變　諒
「わたしたちに明日はない」　一橋省吾
「羽化」「青春ノ病」「紅い花」
「ない言葉」「sweet dreams」「愛していたか」　有澤かおり
「サハラにてⅠ」「サハラにてⅡ」「石棺の町」　松本昂幸
「蜿蜒」　林　やは
「産声―ロココの天命」「涙腺―ロココの展開」　小山修一
「のまれる」「反芻する」　miharu
「ふくらむ月」「個体の空」「透明なリボン」　有門萌子
「最後の歌のあとに」「パンセ」「常に在る庭」　赤津龍之介
「外套膜」「角砂糖と指切り」「哺乳瓶監禁」　野葛間
「Observer」「Invisible」「Mr.Blue Sky」　鈴木歯車
「一歩」「登高」「枯れ木」　清水一美
「今、この位置にあって」「最愛」「しわざ」　河野真優

「hanabi」「Plung into concrete」「Anotherdream」　渡辺八畳
「土葬」「ポタジェ」「恋人」　妻咲邦香
「Oの侵犯―酸化するクロニクル」「ジャカードの夜」　福永十津
「三羽の三足の烏」　河合麻衣
「炎陽」「錦秋」「三冬尽く」
「燃ゆる海　焼ける空」「幼い頃の私」　杜山美帆
「フラワーワールド」
「春恋」「重点」「冬、凍り来る」　龍郷みさき
「杖」「土に眠る」「まだ、」　中道侶陽
「星」「I don't forget」　インバ

「あなたの骨」「わたしの骨」　愛羽　文
「絶望の向こう側で」「悲しみからの旅立ち」　三浦恵子
「精神臨界」　佐々木愛滓
「正しい嘘」「死期」「青い空をみた」　てづかかなこ
「暗号世界のラブドール」「暗号世界の聖剣士」　ヨクト
「暗号世界の神見習い」
「ディアボロだだもれ」「のっぺ一行日記」　むがもち
「お迎えは花の香り」
「かまいたち」「夜叉」「避難民、と、」　津島一馬
「坂を下る」「蝶の痛み」　五十月彩
「宇宙の最期」「はな」「文明」　鳴海　篁
「焼失する夜」「女」「霧の外」　島畑まこと
「凱歌」「波浪」「星の種」　秋葉政之
「わが子に…傍らに眠らせつつ」「目覚め」
「てつぼう」　辻　洋一
「永遠」「磔刑」「青空咽喉」　横川五歩
「春うらら」「わたしの父」「わたしの中に」　山中　六
「旅路」「さよなら、悲しみ」「女王の帰還」　銀森そのみ

持続の研磨の上に

五十嵐　勉

第一八回「文芸思潮」現代詩賞は、上位が安定した力を示していた。すでに最優秀賞・優秀賞の経歴ある詩作者が、濃密な結晶をもたらしていた印象がある。

飛び抜けているものはない代わりに、持続の研磨の上に、繚乱とした華がもたらされた開花感がある。

最優秀賞の由木名緒美氏は、以前の原罪を根にした激烈な上昇展開が、今回はむしろ地に広く染み渡っていく水平方向の展開を見せて、深まりを蔵している。何か大きな体験を乗り越えた余韻が、新たな詩の幅となって降りている。特に「君の命が杯になる」は、肯定的なものを前面に烈しく出し、行の変化によって力強く打ち出していることが、凱歌にも到達し得ている。苦難を乗り越えた光が宿っているように思えた。

後藤順氏は、これまでも一貫して生活に根差した詩を謳い挙げてきたが、今回は特に「染める」が傑出していたことで最優秀賞に輝いた。祖母の人生史を基盤に、藍染めに一生を捧げたひたむきな姿にその本質の深部まで光を届かせた。それが藍という植物の大地からの生育をも汲み取って、自然の根の力から掘り起こしていることが、大きな生きる力を呼び起こしている。一人の生の称賛として、大地をも呼び込み、「この国のすべての女たちへ」と普遍的な共鳴に達している点が、この詩を高めている。詩が一人の女性の魂を高め、広く行き渡ることによって浮かばれる魂鎮めの余韻を響かせているところに、この詩の到達がある。

北村灰色氏は、前回よりも言葉の切れがよくなり、その分、力がこもって言葉に伸びが出た。淀みない言葉はリズムを伴って、紡ぎ出す快感を備えている。また日常風景を捉えながら、その奥にある矛盾や奇怪さを見通す透徹した眼も冴えている。「池袋駅、午後二時」のタイトルも、この眼がなければできない、意表を突く言葉である。特に「秋の牢獄」は高校時代の記憶とオーバーラップして、閉塞する現代の心理と、その打ち破りの企図を投げている。もっと構想とボリュームがあれば、もう一つ上に手が届きそうな位置まで来ている。

叫びという点では、初登場の藤城藍氏に爆裂感があった。「しらふのくるい」は率直な吐露で、感情の裸体感が気持ちいい。やや説明的な部分や、余計な句もあるが、物怖じせずにしっかり振り切り、思い切りぶつける投擲に爽快感がある。このあと壁にぶつかることもあるかもしれないが、今はとにかくこの素直な直球を大事にしてもらいたい。

同じく優秀賞の橘いずみ氏は、平易な言葉を過去からの異相の持ち出しによって、新鮮な現実を立ち上げている。

その心理風景の重なり合いが、精妙な音色を醸し出す。過去に呼びかけ、その木霊と対話するように響きを現在のシーンに投影していく。それが現実を鮮やかに、しかも陰影を色付けて、溶ける美しさを付与している。「たれる」「雫」など、前よりも奥行きが深くなっているのを認めた。

初登場の笹井のぶこ氏は洗練された高い詩想で、豊かなリズムも伴って起伏のうねりも大きく、展開力は雄勁なものがある。この詩は原爆の追悼をこめているとも取れるが、その重なりはまだ明確ではなく、その点の曖昧さが逆に詩を弱めている。さらにその意図を明示し、規模を大きくして天空をめざせば、いっそう飛躍できそうだ。

優秀賞二回目となった薬師丸怜央氏は、「クローン」「アンニュイ」というカタカナ外来語のタイトルの作品はやや落ちる。カタカナを使うと、言葉に込める意思が荒くなり、胸奥に届かなくなる危険を露呈している。「針のような崖の上に立つ翼のない鳶」が最も訴えてきて、薬師丸氏のよさを結ばせている。丸みのある優しさを奥底に湛えた鋭利な言葉群の投擲が自身の美点であることを自覚して、もっとその奥底を広げてほしい。鋭い言葉を投げて叩きつけるその底に広がってくるナイーブな優しさを、意識して深く湛えられるようになると、魅力が倍加するだろう。

遠藤芳子氏の詩は、年々詩としての自立性が高くなり、根はしっかり叫びと怒りを蔵しながら、離陸して翔ける飛翔力を増している。最後の結句部分が弱いが、もっと神への抗議を強めることで、逆に結晶してくる希求があるはずだ。それがいっそう純度を増して、普遍的な母性の祈りとなって、万人の胸に広がっていくことを期待している。

中村郁恵氏は「雑閙（ざっとう）」、「topology」など、これまで台所空間など狭い空間からの位相の裁断に当てられていた視点が、外へ出ていく方向が感じられる。それは評価できるが、curation や topology など用語の説明が煩わしく、詩を損ねている。新用語に頼らない言葉で勝負すべきで、持ち味の立体位相を出入りする感覚の拡大は、それらを用いなくても十分可能なはずである。

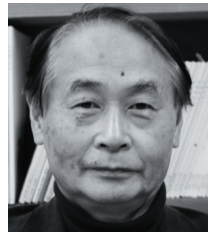
優秀賞の中で最年少一九歳の松永悠希氏は、自然なみずみずしさで快い詩空間を立ち上げている。ただ、ボリュームが足りないので、私は奨励賞に留めて次回を見てもいいのではないかと思ったが、渡辺選考委員の強い推挙に従った。溌剌とした若さの感性が繊細な溶け合いをなして夢を紡いでいる。これに魂を入れるには、華奢な気がしたが、これはこれでみずみずしさの中で結晶を得ているとし、将来を欲張らず、今を大事にすればいいとも言える。どう育って発展するかは博打だろう。

佐藤裕氏の「死の想い」は、詩の言葉としての飛躍性は乏しく、逆に重く執拗な沈降感がある。この鈍重さの中にむしろ誠実な志向性が感じられ、死を想うことによって明

らかになる生の尊さが浮かび上がる。よく読み込まないとわからない晦渋さも伴うが、鈍さと実直さは、共感を呼ぶ。

奨励賞の中で、岩尾宏紀氏は「詩刑執行」などよく工夫されていて、インパクトも強く、優秀賞のレベルと思えたが、少し言葉の練り合わせが過多で、詩想の高揚に力が削がれているのが惜しまれた。麻生ゆり氏も「鮭」など具体物の中に本質を探る新しい斬り込みは評価できるものの、深く抉る背後までの到達が足りなかった。他に遠藤月尾氏の「季節邂逅」、新夏氏の「木蓮」、実川阿仁氏の「隙間を泳ぐ」などが印象に残っている。

現代社会の上部は凄まじい勢いでシステム化が進んでいる。一人一人の人間が自由に生きていく領域はますます狭められ、圧迫されている。特に若者をはじめ、いったんレールを外れた者にとって、生きにくさは倍加する。しかしそれになんとか持ちこたえて、未来へ踏み出す力を蓄えて欲しい。詩はそれらへのよすがの一つになりうる。思いを叩きつけ、叫びを発して、この世界の矛盾を告発してほしい。それが美しい結晶としての言葉であればあるほど、神の胸を射抜くだろう。



五十嵐　勉
いがらし　つとむ

1949　山梨県生まれ
79「流謫（るたく）の島」で群像新人長編小説賞受賞
98「緑の手紙」で読売新聞・NTTプリンテック主催第1回インターネット文芸新人賞最優秀賞受賞
2002「鉄の光」で健友館文学賞受賞
他に中篇小説集「ノンチャン、NONGCHAN／聖丘寺院（ワッドプノム）へ」長篇「破壊者たち」戯曲「核の信託」など

入選

「眼」　苑田有子
「きりさめる」「あなたは　だあれ」いまだまりこ
「支柱」「傷の葉」「流風」　柚詠
「夜叉」「水溶性」「初めてのウサギ」坂井　傑
「小舟」　日々野いずる
「チャイナローズ」「人生」「安住の地」霜月愛子
「蝋燭」「恩人」「の前」　麻
「日向ぼっこ」「豪雨」　はしのぶしげ
「海上都市」「割り切れない病い」　夏宝洛
「異国の思い出」　片岡周子
「返事をして惑星」　てるてる
「月めくるいのち言葉」
「緩やかに歩き続け、眠ることを知らない」　鬼尾聖来
「溢れる汽車」

「滅びるね、人間は」「地獄湯」「偶然の一本松」　岩崎　明
「リンチパーティなんかやめろ」
「モンスタークレーマーなんかいらない！」三日月李衣
「もっと光を」「草木の声なき声」
「船乗りたちへ贈る唄」　徳年
「言葉」　深山麻衣
「ひかり」「しおり」　古宮行恵
「花を愛でる」「春を生き抜く」　街角　香
「月夜の人魚の解剖学」「Emerald Tiger」
「華想夢幻～緋色の残響」　神崎梨花
「グレープフルーツの詩」「愛の詩」
「無限と琴線の詩」　神崎琴音
「うしろから」「ノルマンディー」　馬渕兼一
「驟涙」「捧げるハーモニー」「眺める」芳水るびい
「百日紅」「雨後」　田村全子
「重さ」「痛みなきイタミ」
「私は宇宙に飢えている」　Aquira A.
「かたつむり」「星あそび」「無言」Rata
「夕方から夜にかけて」　日下直哉
「そのとき」「花の香り」「水仙の花」五十嵐ソフィー
「その世界と、と、と、と、世界」　J
「最果てには」「憎しみとか」「死人」伊吉マリ
「パレード」「命の勲章」　いしぜきけいこ
「デスロール」　設楽いくこ
「押し花」　若松橙花
「今はまだ他人事のお話」「過去に潜むミイラ」南月
「あっとうてきにできること」「どこかでみた死」　珠芽めめ
「Soulmate」「あのカフェで」「ゆっくり底へ」　上原翔子
「還る場所」「たしかにそこに」
「それでも生きていく」　舘　友利
「流雪」「彼方へ」「一音」　東風佳子
「つよさをください」「いのち」「美徳」皇　朝子
「桃色の挨拶」「祈り」「問」　有明
「優しさ」「こころ」　愛香
「揺れ」「自転」　雨霧あめ
「閃光」「不在届」「夏の空」　可不可
「落差」「ディスタンス」「同時性」水無川渉
「愛について」「星とダンス」　山口たおず
「汚染」「化粧」　寝癖
「遮断機のほうへ」「闇の中で人間」
「グレゴリー、底抜ける森が」　渡部榮太
「変化」「紫陽花」「リゲル」　白井鶴乃
「呼吸」「射精」「朝」　坂田康雄
「現象群」「アルミ缶」「飴細工」　水縹　悠
「Plankton……,Planet……,Planetarium」
「墓をのみこむ」「みなしごたち」　赤津将太